

共催展「深谷の化石」－化石でたどる海と陸のドラマ－の開催

坂本 治・本間岳史・井上素子

深谷市（旧川本町）の荒川河床に露出する新第三紀の地層は、豊富な海生動物化石と陸生植物化石を産し、秩父盆地とともに埼玉有数の化石産地として知られています。とりわけ、当地の地層とそこに含まれる化石は、太古の海から陸への環境の変遷を如実に語るものとして、たいへん重要な意義を持っています。

本企画展は、埼玉県立自然の博物館と深谷市が連携し、深谷市民をはじめ多くの方々に化石をおしてそのおいたちを紹介することを目的としています。会場と会期は、深谷市川本出土文化財管理センター展示室で、平成24年3月3日（土）～3月25日（日）の23日間です。

展示の概要は、以下のとおりです。

深谷市の地形・地質のあらまし

平成18年、深谷市、岡部町、川本町、花園町がひとつになり誕生した新「深谷市」は、埼玉県北西部に位置しています。市北部は利根川水系の低地で、南部は秩父山地から流れ出た荒川が扇状地を形成する平坦な地形をしています。また、荒川河床は、比企層群土塩層・楊井層が分布し、海成層から陸生層へと連続した地層の変化を観察できる重要な場所です。

新第三紀の海－菅沼の海生動物化石－

約1000万年前に海底に堆積した土塩層は、カルカロドンメガロドンなどのサメ類をはじめ、各種海生動物化石を多産します。深谷市菅沼一帯から産出した海生動物化石を中心に当時の生物相や古環境を紹介します。

新第三紀の森－平方の植物化石－

約900万年前の楊井層には、河口付近の網状河川の堆積物がみられ、メタセコイアをはじめとする陸の植物化石が多産します。土塩層とその上に重なる楊井層は、まさに海から陸への変遷を語ってくれます。サイの頭骨化石の産出から、日本の島が陸続きであったこともうかがえます。

第四紀の古生物－深谷にゾウがいた頃－

氷河時代とも称される第四紀は、長鼻類（ゾウ類）の進化をたどることができる時代です。

今から約50万年前、秩父山地から流出した荒川は、寄居町を扇頂として広大な扇状地を形づくりしました。自然環境の変化に伴いこの扇状地は、河

川に削られ、いくつもの河岸段丘を刻みました。約10万年前に生息したナウマンゾウの臼歯の化石が、この段丘堆積物中から発見されています。写真は、深谷市折之口で井戸の掘削中に発見された臼歯（右上顎第3大臼歯）です。

川本の巨大ザメとその復元

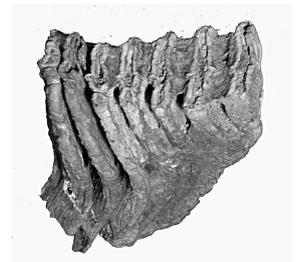
昭和61（1986）年に菅沼の荒川で発見された巨大ザメ、カルカロドンメガロドンは、同一個体の73本の歯群化石として知られ、埼玉県立自然の博物館でその復元が試みられ公開されています。発見から化石復元の過程を、模型や記録写真をもとに紹介します。



植松橋上空より北方をのぞむ



カルカロドンメガロドン



ナウマンゾウ臼歯

－関連普及事業－

- ・平成24年3月10日（土）講演会
演題1：地層は語る－海から陸への大地のドラマ－
演題2：化石は語る－巨大ザメ カルカロドンメガロドンの話－
会場：深谷市川本文化センター研修室（定員：70名）
- ・平成24年3月17日（土）地質観察会「太古の化石林をさぐる」深谷市本田平方の荒川（定員：30名）

（さかもと おさむ・専門員兼学芸員）
（ほんま たけし・専門員兼学芸員）
（いのうえ もとこ・学芸員）